

## 入れ札

菊池 寛

上州岩鼻の代官を斬り殺した国定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠つて、八州の捕方とりかたを避けてゐたが、其処も防ぎ切れなくなると、忠次を初はじめ、十四五人の乾児こぶんは、辛むづかく一方の血路を、斫り開いて、信州路へ落ちて行つた。

夜中に利根川を渡つた。渋川の橋は、捕方が固めて居たので、一里ばかり下流を渡つた。水勢が烈しいため、兩岸に綱を引いて渡つたが、それでも乾児の一人は、つい手を離れたゝめ流されてしまつた。

渋川から、伊香保街道に添うて、道もない裏山を、榛名にかゝつた。一日、一晚で、やつと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまふと、直ぐ其処

に大戸の御番所があつた。

信州へ出るのには、この御番所が、第一の難関であつた。此の関所をさへ越してしまへば、向うは信濃境まで、山又山が続いて居る丈であつた。忠次達が、関所へかゝつたのは、夜の引き明けだつた。わづか、五六人しか居ない役人達は、忠次達の勢に怖れたものか、彼等の通行を一言も咎めなかつた。

関所を過ぎると、遠さきに皆は、ほつと安心した。本街道を避けて、裏山へかゝつて来るに連れて、夜がしらくくと明けて来た。丁度上州一円に、春蚕かへらが孵化かへららうとする春の終の頃であつた。山上から見下すと、街道に添うた村々には青い桑畑が、朝靄の裡に、何処までも続いて居た。

関東縞の袷に、鮫鞆の長脇差を佩さして、脚絆草鞋わらぢで、嚴重な足ごしらへをした忠次は、昔のふき下しの笠を冠つて、先頭に立つて、威勢よく歩いて居た。小鬢の所に、傷痕のある浅黒い顔が、一月に近い辛苦で、少し寝れが見えたゝめ、一層凄味を見せて居た。乾児も、大抵同じやうな風体をして

居た。が、忠次の外は、誰も菅笠を冠つては居なかつた。中には、片袖の半分断れかけて居る者や、脚絆の一方ない者や、白つぼい縞の着物に、所々血を滲ませて居るものなども居た。

街道を避けながら、而も街道を見失はないやうに、彼等は山から山へと辿つた。大戸の関から、二里ばかりも来たと思ふ頃、雑木の茂つた小高い山の中腹に出てゐた。ふと振り返ると、今まで見えなかつた赤城が、山と山の間、ほのかに浮び出て居た。

「赤城山も見収めだな。おい、此処いらで一服しようか。」

さう云ひながら、忠次は足下に大きな切り株を見付けて、どつかりと、腰を下した。彼の眼は、暫らくの間、四十年見なれた山の姿に囚はれてゐた。赤城山が利根川の谿谷へと、緩い勾配を作つて居る一帯の高原には、彼の故郷の国定村も、彼が売出しの当時、島村伊三郎を斬つた境の町も、彼が一月前に代官を斬つた岩鼻の町もあつた。

国越をしようとする忠次の心には、さすがに淡

い哀愁が、感ぜられて居た。が、それよりも、現在一番彼の心を苦しめて居ることは、乾児の始末だつた。赤城へ籠つた当座は、五十人に近かつた乾児が、日数が経つに連れ、二人三人潜かに、山を降つて逃げた。捕方の総攻めを喰つたときは、二十七人しか残つて居なかつた。それが、五六人は召とられ、七八人は何処ともなく落ち延びて、今残つて居る十一人は、忠次のためには、水火をも辞さない金鉄の人々だつた。国を売つて、知らぬ他国へ走る以上、此先、あまりいゝ芽も出さうでない忠次のために、一緒に関所を破つて、命を投げ出して呉れた人々だつた。が、代官を斬つた上に、関所を破つた忠次として、十人余の乾児を連れて、他国を横行することは出来なかつた。人目に触れない裡に、乾児の始末を付けてしまひたかつた。が、みんなと別れて、一人限になつてしまふことも、いろ／＼な点で不便だつた。自分の目算通に、信州追分の今井小藤太の家に、ころがり込むにした所が、国定村の忠次とも云はれた貸元が、乾児の一人も連れずに、顔を出すことは、

二けん  
沽券にかゝはることだつた。手頃の乾児を二三人連れて行くとしたら、一体誰を連れて行かう。さう思ふと、彼の心の裡では、直ぐその顔触が定つた。平生の忠次だつたら、「おい！ 浅に、喜蔵に、嘉助とが、俺と一緒に来るんだ！ 外の野郎達は、銘々思ひ通りに落ちて呉れ、路用の金は、分けてやるからな！」

と、何の拘泥もなく云へる筈だつた。が、忠次は赤城に籠つて以来、自分に対する乾児達の忠誠をしく、感じてゐた。鯉節や生米を嚙つて露命を撃ぎ、岩窟の樹の下で、雨露を濺いで居た幾日と云ふ長い間、彼等は一言も不平を滾さなかつた。忠次の身体が、赤城山中の地藏山で、危険に瀕したとき、みんなは命を捨てゝ働いて呉れた。平生は老ぼれて、物の役には立つまいと思はれて居た闇雲の忍松までが、見事な働きをした。

さうした乾児達の健気な働きと、自分に対する心持とを見た忠次は、その中の二三人を引き止めて他の多くに暇をやるのが、何うしても気がすゝまなかつた。皆一様に、自分のために、一命

を捨てゝかゝつて居る人々の間に、自分が甲乙を付けることは、何うしても出来なかつた。剛愎な忠次も、打ち続く艱難で、少しは気が弱くなつて居る故もあつたのだらう。別れるのなら、いつそ皆と同じやうに、別れようと思つた。

彼は、さう決心すると、

「おい！ みんな！」と、周囲に散かつて居る乾児達を呼んだ。烈しい叱り付けるやうな声だつた。喧嘩の時などにも、叱咤する忠次の声丈は、狂奔して居る乾児達の耳にもよく徹した。

草の上に蹲まつたり、寝ころんだり、銘々思ひ／＼の休息を取つて居た乾児達は、忠次の一喝でみんな起き直つた。数日來の烈しい疲労で、とろ／＼眠りかけて居るものさへあつた。

「おい！ みんな。」

忠次は、改めて呼び直した。『壺皿見透し』と、若い時綽名を付けられてゐた、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！ 一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺これから、信州へ一人で、落ちて行かうと思ふの

だ。お前達を、連れて行きてえのは山々だが、お役人をたゞつ斬つて、天下のお関所を破つた俺達がお天道様の下を、十人二十人つながつて歩くことは、許されねえ。もつとも、二三人は、一緒に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前達みんなの中から、汝は行け汝は来るなど云ふ区別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人残らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。別れるからなら、恨みつこのねえやうに、みんな一緒に別れてしまひてえのだ。さあ、茲こゝに使ひ残りの金が、百五十両ばかりあらあ。みんなに、十二両宛、呉れてやつて、残つたのは俺が貰つて行くんだ。銘々に、志を立て、落ちて呉れ！随分、身体に氣を付けろ！忠次が、何処かで捕まつて、江戸送りにでもなつたと聞いたら、線香の一本でも上げて呉れ！」

忠次は、元気にさう云ふと、胴巻の中から、五十両包みを、三つ取り出して、熊笹の上に、ずしりと投げ出した。

が、誰もその五十両包みに、手を出すものはない

かつた。みんなは、忠次の突然な申出に、何う答へていゝか迷つて居るらしかつた。一番に、乾児達の沈黙を破つたのは、大間々の浅太郎だつた。「そりや、親方悪い了簡だらうぜ。一体俺達が、妻子眷族を見捨て、此処までお前さんに、従いて来たのは、何の為だと思ふのだ。みんな、お前さんの身の上を氣遣つて、お前さんの落着く所を見届けたいと思ふ一心からぢやないか。いくら、大戸の御番所を越して、もうこれから信州までは大丈夫だと云つたところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、出来るものぢやねえ。尤も、かう物騒な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは、道理なのだから、お前さんが、此奴だと思ふ野郎を、名指してお呉んなせえ。何も親分乾児の間で、遠慮することなんかありやしねえ。お前さんの大事な場合だ！恨みつらみを云ふやうな、ケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ兄弟！」

みんなは、異口同音に、浅太郎の云ひ分に賛意を表した。が、さう云はれて見ると、忠次は尚更選みかねた。自分の大事な場所である文だけに、彼等

の名前を指すことは、彼等に対する信頼の差別を、露骨に表はす事になつて来る。それで、選に洩れた連中と——内心、忠次を怨むかも知れない連中と——其儘、再会の機も期し難く、別れてしまはねばならぬ事を考へると、忠次は何うしても、気が進まなかつた。

忠次は口を噤んだ儘、何とも答へなかつた。親分と乾児との間に、不安な沈黙が暫らく続いた。

「あゝ、いゝ事があらあ。」釈迦しやがの十蔵と云ふ未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の盃を貰つてから未だ二年にもなつて居なかつた。

「籤引がいゝや、みんなで籤を引いて、当つた者が親分のお供をするのがいゝや。」

当座の妙案なので、忠次も乾児も、十蔵の方を一寸見た。が、嘉助といふ男が直ぐ反対した。

「何を云つてやがるんだい！ 籤引だつて！ 手前の様な青二才に籤が当つて見ろ、返つて親分の足手纏てづなひぢやねえか。籤引なんか、俺あ真ツ平まひらだ。此座時に一番物を云ふのは、腕つ節だ。おい親分！ くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助つい

て来いと、云つてお呉んなせい。」

四斗樽を両手に提げ乍ら、足駄を穿いて歩くこと云ふ嘉助は一行中で第一の大力だつた。忠次が心の裡で選んで居る三人の中の一人だつた。

「嘉助の野郎、何を大きな事を云つてやがるんだい。腕つ節ばかりで、世間は渡わたられねえぞ。まして此れから、知らねえ土地を遍歴つて、上州の国定忠次で御座いと云つて歩くには、駄引万端の軍師がついて居ねえ事には、どうにもならねえのだ。幾ら手前が、大力だからと云つて、ドヂ許はがりを踏んで居ちや、旅先で、飯にはならねえぞ。」

さう云つたは、松井田の喜蔵と云ふ、分別盛りの四十男だつた。忠次も喜蔵の才覚と、分別とは認めて居た。彼は、心の裡で喜蔵も三人の中に加へて居た。

「親分、俺あお供は出来ねえかねえ。俺あ腕節は強くはねえ。又、喜蔵の様に軍師ぢやねえ。が、お前さんの為には、一命を捨てゝもいゝと、心の内できつとく覚悟を極めて居るんだ。」

闇雲の忍松おしのが、其処迄云ひかけると、乾児達は、

周囲から口々に罵つた。

「何を云つてやがるんだい、親分の為に命を投げ出して居る者は、手前一人ぢやねえぞ、巫山戯た事をぬかすねえ。」

さう云はれると、忍松は一言もなかつた。半白の頭を、テレ隠しに搔いて居た。

さうして居るうちに、半時ばかり経つた。日光山らしい方角に出た朝日が、もう余程さし登つて居た。忠次は、黙々として、みんなの云ふ事を聴いて居た。二三人連れて行くとしたら、彼は籤引では連れて行きたくなかつた。やつぱり、信頼の出来る乾児を自ら選びたかつた。彼は不図一策を思ひ付いた。それは、彼が自ら選ぶ事なくして、最も優秀な乾児を選び得る方法だつた。

「お前達の様に、さうザワ／＼騒いで居ちや、何時が来たつて、果てしがありやしねえ。俺一人を手離すのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をして見ちや、どうだい。札数の多い者から、三人丈連れて行かうぢやねえか。こりや一番怨みつこがなくつて、いゝだらうぜ。」

忠次の言葉が終るか終らないかに、

「そいつあ思ひ付きた。」乾児にうちで一番人望のある喜蔵が賛成した。

「そいつあ趣向だ。」大間々の浅太郎も直ぐ賛成した。

心の裡で、籤引を望んで居る者も数人あつた。

が、忠次の、怨みつこの無いやうに、而も役に立つ乾児を、選ばうと云ふ肚が解ると、みんなは異議なく入れ札に賛成した。

喜蔵が矢立を持つて居た。忠次が懐から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜蔵が受取ると、長脇差を抜いて手際よくそれを小さく切り分けた。

さうして、一片宛みんなに配つた。

先刻からの経路を、一番厭な心で見居たのは稲荷の九郎助だつた。彼は年輩から云つても、忠次の身内では第一の兄分でなければならなかつた。が、忠次からも、乾児からも、そのやうには扱はれて居なかつた。去年、大前田の一家と一寸した出入のあつた時、彼は喧嘩場から、不覚にも大前田の身内の者に、引つ担がれた。それ以来、彼は

多年培つて居た自分の声望がめつきり落ちたのを知つた。自分から云へば、遙かに後輩の浅太郎や喜蔵に段々凌がれて来た事を、感じて居た。そればかりでなく、十年前迄は、兄弟同様に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次迄が、何時となく、自分を軽んじて居る事を知つた。皆は表面こそ『阿兄！阿兄！』と立てゝ居るものゝ、心の裡では、自分を重んじて居ないことが、ありくゝと感ぜられた。

入れ札と云ふ声を聴いたとき、九郎助は悪いことになつたなあと思つた。今迄、表面丈は兎も角も保つて来た自分の位置が、露骨に崩されるのだと思ふと、彼は厭な気がした。十一人居る乾児の中で自分に入れて呉れさうな人間を考へて見た。が、それは弥助の他には思ひ当らなかつた。弥助も九郎助と同様に、古い顔であつて、後輩の浅太郎や、喜蔵などが、グン／＼頭を擡げて来るのを、常から快からず思つて居るから、かうした場合には、屹度自分に入れて呉れるだらうと思つた。が、弥助丈は自分に入れて呉れるとしても、弥助の一

枚丈で、三人の中に入ることは考へられなかつた。浅太郎には四枚入るだらうと思つた。喜蔵に三枚入るとして、十一枚の中、後へ四枚残る。その中、自分の一枚をのけると三枚残る。若し、その中、二枚が、自分に入れられて居れば、三人の中に加はることは出来るかも知れないと思つた。が、弥助の他に、自分に入れて呉れさうな人は、どう考へても当がなかつた。ひよつとしたら、並川の才助がとも思つた。あの男の若い時には、可成り世話を焼いてやつた覚えがある。が、それは六七年も前のことで、今では『浅阿兄、浅阿兄』と、浅にばかりくつ付いて居る。さう思ふと、弥助の入れて呉れる一枚の他には、今一枚を得る当は、何うにもつかかなかつた。乾児の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは——自分の信望が少しも無いことがまぎ／＼と表はれることは、もう既定の事実のやうに、九郎助には思はれた。不愉快な寂しい感じに堪へられなくなつて来た。

一本しか無い矢立の筆は、次から次へと廻つて

来た。

「おい！ 阿兄！ 筆をやらあ。」

ぼんやり考へて居た九郎助の肩を、つゝきながら横に居た弥助が、筆を渡して呉れた。弥助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。それは、たしかに好意のある微笑だつた。『お前を入れたぜ。』と云ふやうな、意味を持つた微笑であるやうに九郎助は思つた。さう思ふと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるやうに思はれた。忠次に着いて行つたところで、自分の身に、いゝ芽が出ようとは思はれなかつたが、入れ札に洩れて、年甲斐も無く置き捨てにされるのが何うしても堪らなかつた。浅太郎や喜蔵の人望が、自分の上にあることが、マザ／＼と分ることが、何うしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つてぼんやり考へた。

「おい！ 阿兄！ 早く廻してくんな！」

横に坐つて居る浅太郎が、彼に云つた。阿兄！

と云ひながらも、語調丈は、目下を叱して居るやうな口調だつた。九郎助は、毎度のことながらむつとした。途端に、相手に対する烈しい競争心が

——嫉妬がムラ／＼と彼の心に渦巻いた。

筆を持つて居る手が、少しブル／＼顫へた。彼は、紙を身体で掩ひかくすやうにしながら、仮名で『くろすけ』と書いた。

書いてしまふと、彼はその小さい紙片をくる／＼と丸めて、真中に置いてある空になつた割籠の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中に直ぐ起つた。

『賭博は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな。』

口癖のやうに、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガン／＼鳴りひびくやうな気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロ／＼見て居るやうな気がして、何うしても顔を上げることが出来なかつた。

吉井の伝助は、無筆だつたので、彼は仲よしの才助に、小声で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまふと、忠次が、



「喜蔵！ お前読み上げて見ねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半数のものは諦めて居たが、それでも銘々、うぬぼれは持つて居た。壺皿を見詰めるやうな目付きで、喜蔵の手許を睨んで居た。

「あさ、あゝ浅太郎の事だな、浅太郎一枚！」

さう叫んで喜蔵は、一枚、札を別に置いた。

「浅太郎二枚！」彼は続いてさう叫んだ。

又、浅太郎が出たのである。浅太郎が、此の二年忠次の信任を得て、影の形に付き従ふやうに、忠次が彼を身辺から放さなかつたことは、乾児の者が皆よく知つて居た。浅太郎の声がづくと、忠次の浅黒い顔に、ニツと微笑が浮んだ。

「喜蔵が一枚！」

喜蔵は、自分の名が出たのを、嬉しさうに、ニコリと笑ひながら叫んで、

「嘘ぢやねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次ぎが又、喜蔵だ！」

喜蔵は得意げに、又紙札を高く差上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私ひそかに選んで居る三人が、入札の表おもてに現はれて来るのが、嬉しかつた。乾児達が自分の心持を、察して居て呉れるのが嬉しかつた。

「何だ！ くろすけ、九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜蔵は、声高く叫んだ。九郎助は、顔から火が出るやうに思った。生れて初めて感ずるやうな羞恥と、不安と、悔恨とで、胸の裡が掻きむしられるやうだ。自分の手蹟を、喜蔵が見覚えては、居はしないかと思ふと、九郎助は立つても坐つても居られないやうな氣持だつた。が、喜蔵は九郎助の札には、こだはつて居なかつた。

「浅が三枚だ！ その次は、喜蔵が三枚だ！」

喜蔵は大声に叫びつゞけた。札が次ぎ／＼に読み上げられて、喜蔵の手にたつた一枚残つたとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だつた。嘉助と九郎助とが各自一枚宛だつた。

九郎助は、心の裡で懸命に弥助の札が出るのを待つて居た。弥助の札が出ないことはないと思つ

て居た。もう一枚さへ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思つて居た。

が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だった。

「さあ！ みんな聞いてくれ！ 浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑はしいと思ふ奴は、自分で調べて見るといゝや。」喜蔵は最後の決定を伝へながら、一座を見廻した。

誰も調べて見ようとはしなかつた。誰よりも先に、九郎助はホツと安心した。

忠次は自分の思ひ通りの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上つた。

「ぢや、みんな腑に落ちたんだな。それぢや、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行かう。九郎助は、一枚入つて居るから連れて行きたいが、最初云つた言葉を変改することは出来ねえから、勘弁しな。さあ、先刻からえらう手間を取つた。ぢや、みんな金を分けて銘々に志すところへ行つて呉れ。」

乾児の者は、忠次が出してあつた裡から、銘々に十二両宛を分けて取つた。

「ぢや、俺達は一足先に行くぜ。」忠次は選ばれた三人を磨くと、みんなに最後の会釈をしながら、頂上の方へぐんぐ上りかけた。

「親分、御機嫌よう。御機嫌よう。」

去つて行く忠次の後から、乾児達は口々に呼びかけた。

忠次は、振り向きながら、時々、被つて居る菅笠を取つて振つた。その長身の身体は、山の中腹を掩うて居る小松林の中に、暫くの間は見え隠れして居た。

取り残された乾児達の顔には、それくく失望の影があつた。

「浅達が付いて居りや、大した間違はありやしねい！」

口々に同じやうなことを云つた。が、やつぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持つて居た。

が、忠次達の姿が見えなくなると、四五人は諦めたやうに、草津の方へ落ちて行つた。

九郎助は、忠次と別れるとき、目礼したまゝぢつと考へて居た。落選した失望よりも、自分の浅

ましさが、ヒシ／＼骨身に徹こたへた。札が、二三人に蒐あつつて居るところを見ると、みんな親分の為を計つて、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心を汲んで、浅や喜蔵を選んだのだ。さう思ふと、自分の名をかけた卑しさが愈々堪へられなかつた。

朝の微風が吹いて来て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひらく／＼と飛びさうになつた。

「あゝ、こんなものが残つて居ると、とんだ手ばかりにならねえとも限らねえ。」

さう云ひながら、九郎助は立ち上つて散ばつて居る紙片かみきれを取り蒐めると、めちやく／＼に引き断ちぎつて投げ捨てた。九郎助の顔は、凄いほどに蒼あざかつた。

「俺おいら、秩父の方へ落ちようかな。」

九郎助は独言ひとりごとのやうに云つた。彼は仲間の誰とも顔を合して居るのが厭いとだつた。秩父に遠縁の者が居るのを幸に、其処で百姓にでもなつてしまひたかつた。

彼は、草津へ行つた連中とは、反対に榛名の西南の麓を目ざして、ぐん／＼山を降りかけた。

彼が、二三町も来たときだつた。後から声をかけるものがあつた。

「おい阿兄あにい！ 稻荷いなりの阿兄！」

彼は、立ち止つて振り顧つた。見ると、弥助が、息を切らしながら、追ひかけて来たのであつた。

彼は弥助の顔を見たときに、烈しい憎悪が、胸の裡に湧いた。大切な場合に自分を裏切つて居ながらまだ身の振方をでも相談しようとするらしい相手の凶々しい態度を見ると、彼はその得手勝手が、叩き切つてやりたいほど、癪いらに障つた。

「俺おいら、よつほど草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父が居るのだ、少しは、熊谷は危険かも知れねえが、故郷へかへる足溜りには持つて来いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き合つて呉れねえか。」

九郎助は、返事をする事さへ厭いとだつた。黙つて、すたこら歩いて居た。

弥助は、九郎助が機嫌が悪いのを知ると、傍へ寄つた。

「俺あ、今日の入札には、最初はなから厭いとだつた。

親分も親分だ！ 餓鬼の時から一緒に育つたお前を連れて行くと云はねえ法はねえ。浅や喜蔵は、いくら腕節や、才覚があつても、云はゞ、お前に比べればホンの小僧つ子だ。たとひ、入れ札にするにしたところが、野郎達が、お前を入れねえと云ふことはありやしねえ。十一人の中でお前の名をかけたのは、この弥助一人だと思ふと、俺あ彼奴等の心根が、全くわからねえや。」

黙つて聞いた九郎助は、火のやうなものが、身体の周囲に、閃いたやうな気がした。

「此の野郎！」 さう思ひながら、脇差の柄を、左の手で、グツと握りしめた。もう、一言云つて見ろ、抜打ちに斬つてやらうと思つた。

が、九郎助が火のやうに、怒つて居ようとは夢にも知らない弥助は、平気な顔をして寄り添つて歩いて居た。

柄を握りしめて居る九郎助の手が、段々緩んて来た。考へて見ると、弥助の嘘を咎めるのには、自分の恥しさを打ち開けねばならない。

その上、自分に大嘘を吐いて居る弥助でさへ、

自分があんな卑しい事をしたのだとは、夢にも思つて居なければこそ、こんな白々しい嘘を吐くのだと思ふと、九郎助は自分で自分が情けなくなつて来た。口先丈の嘘を平気で云ふ弥助でさへが考へ付かないほど、自分は卑しいのだと思ふと、頭の上に輝いて居る晩春のお天道様が、一時に暗くなるやうな味気なさを味つた。

山の多い上州の空は、一杯に晴れて居た。峰から峰へ渡る幾百羽と云ふ小鳥の群が、黄い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通つて居る。行手には榛名が、空を劃つて蒼々と聳えて居た。